

遭難事故の未然防止対策を考える

1 月 5 日付けの新聞朝刊に、苗場かぐらスキー場で行方不明になっていたスノーボーダー 3 人が、スキー場とは反対側の斜面にいるところを県警のヘリが発見、救助されたという記事が載っていた。3 人は 2 日、リフトを降りて北西方向のスキー場外の斜面に向かった。深い雪に身動きができなくなり、携行していた折りたたみスコップで雪洞を掘ってビバーク。翌日、リフト降り場に戻ろうとしたが、吹雪で行動できず、また雪洞を掘ってビバーク。4 日午前 8 時 50 分頃、神楽峰の頂上を目指しているところを発見され、救助された。テレビのニュースでは、「山の怖さを知りました」と、リーダーの男性が泣きながら訴えていた。

バックカントリースキーが人気だという。スキーのインストラクターをやっている知人が、ゲレンデをパトロールしているとゲレンデの外に出ようとしている人を見つける。注意すると、大丈夫だといって出て行ってしまう（パトロールには制止する権限はないんだとか・・・）。案の定、行方不明となって、翌日捜索することになる。最近多い、現象だそう。高校時代のスキー部の顧問の先生は、ベテランの登山家でもある。彼はその先生から「お前はゲレンデから出ちゃダメだぞ、スキーヤーであって山ヤじゃないんだから」と、きつく言い渡されているそうだ。言われなくたって、分かっていますよ。冬山は怖い。スキー場の中にいればそこはスキー場だが、スキー場から一歩外に出ればそこは冬山。そのことが分かっていないバックカントリースキーヤーが多すぎる。

警察庁生活安全局地域課による「平成 25 年中における山岳遭難の概況」（平成 26 年 6 月 12 日付）では、発生件数 2,172 件、遭難者数 2,713 人、うち死者・行方不明者数 320 人、負傷者数 1,003 人、無事救助 1,390 人で、いずれも統計の残る昭和 36 年以降最多。未然防止対策として、①登山計画の作成。自分の登山経験に見合った、余裕ある登山計画の立案 ②単独登山は避ける ③危険箇所の把握 ④的確な状況判断、登山中止などの早めの決断。⑤転・滑落防止。滑り難い高品質の靴、ストックなどの用意。慎重な行動。⑥道迷い防止。地図・磁石・高度計・GPS をつかいこなして現在地確認、が挙げられていた。

まったくその通りなのだが、彼らに周知徹底できるのか。注意されてもゲレンデから出て行くスキーヤー・ボーダーがあとを絶たないのは、彼らが山の危険・怖さを知らないからだ。山の怖さを知らなくては、6 項目に目が向きっこない。今、考えねばいけないことは、6 項目を周知徹底する方法を考えるのではなく、山の危険・怖さを知らしめる方法を考えることだ、と思う。冒頭のリーダーではないが、山の怖さを知ればだれに注意されずとも、6 項目に目配りするようになる。彼を呼んで、「バックカントリースキーの危険」について講演してもらおうのも一つの方法かもしれない。